

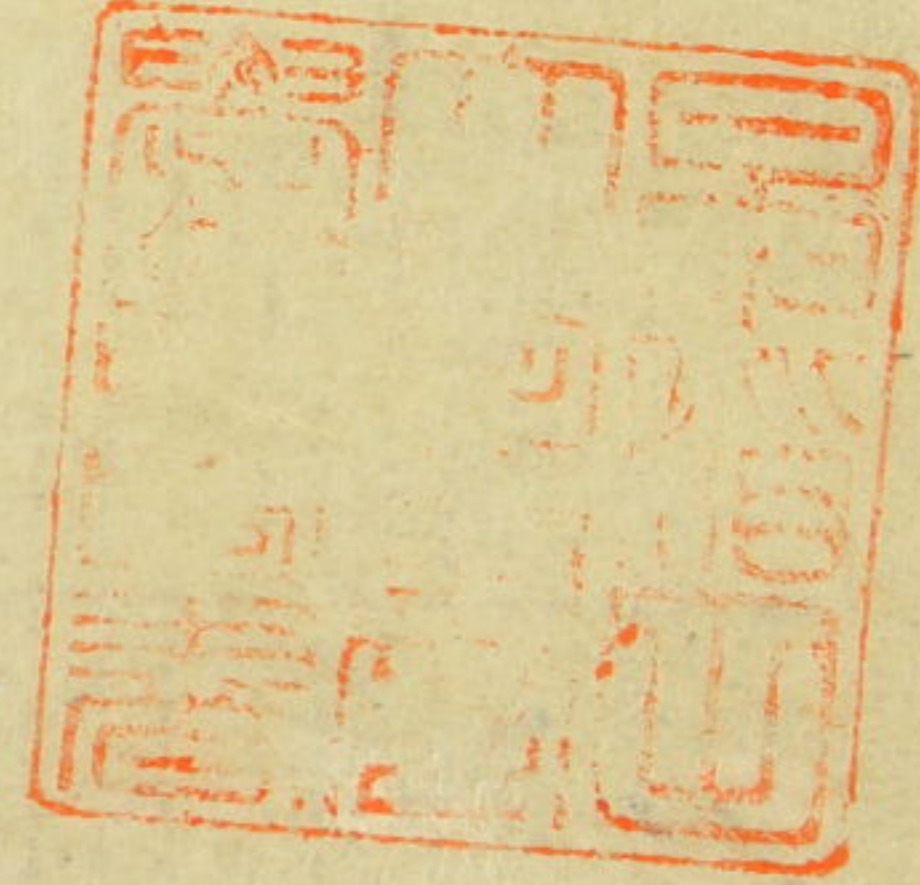
正史
 實傳
 以
 三波文庫
 三

~13
 4307
 3



ハ13
4307
3

2
250
3



早稲田大學教育學部

16091

<2000-331>

伊波文庫第三輯の序

難波津の宇屋をくま習うて免お教へし
あんなあぢの路くかまもかうもさだ
大海のうらほにほくはくはくはく
中つちのあぢのほくはくはくはくはく
のまへに思あひの物の奉返しあはく
はくはくはくはくはくはくはくはく

久松の及古松集めし為に文庫の中あり
あつては揺り出し四十七忠臣考子を列傳し
倭書やぶるも必軒のころあつたもふらむ其の
冠とふ教訓美法といふもあつたもふらむ其の
このは小冊に教をて平流といふもあつたもふらむ
そのまゝ大教をてあつたもふらむ其の
總てはあつたもふらむ其の

久松の及古松集めし為に文庫の中あり
あつては揺り出し四十七忠臣考子を列傳し
倭書やぶるも必軒のころあつたもふらむ其の
冠とふ教訓美法といふもあつたもふらむ其の
このは小冊に教をて平流といふもあつたもふらむ
そのまゝ大教をてあつたもふらむ其の
總てはあつたもふらむ其の



古くは水入流の古今茶士の何の思ふも
 他を冷やすやうなふりも時々の蓮花菴の
 舟は清い水もあつたあつた矢張りあつた巻
 揚子舟は採

為に東の川の連歌

方丈室坐之人玉枝





街の
重賢が
質朴
小飾の形勢不驚く

独青



中垣重賢の忠厚鐵心の
臣の酒を好む癖ありて
心も常に武事小
急心をく盟約の烈
本望を遂るの期に
至る塩谷家
忠臣の中の
其一個あり
柳唐國の
勇臣は比まぬ
伍子胥樊噲の如く
忠臣は比まぬ揚脩
辛毘の趣あり可謂武勇の義ありと
月花にこれくるは春

中垣玄藏重賢



晋豫議を説く忠臣として諺に似たり
 豫誠の旨は列々忠臣の異なり其志を棄てざる
 其諺演戲よみて過言歟

思ひぬまらり討果て
 大望の防びと除くと
 せーるまらり

大星良雄
 罷居
 瀬川
 竹之丞

森胡平太正知義士同盟の二個也大星と心を會
 敵地の安水内とさるる夜討の前夜迄苦心せし忠士なるも
 後世の予配を預りしゆふ早余余烈せざる
 大星が深き慮み
 仍る義士未
 先を賜ふ聞
 終り書提
 所いあつて
 自書を委
 俱に絶を
 同手れをも
 本望遂ち
 日一同せざる
 ゆふ世入其
 忠を肯せは薄命亦憐み及て汚名を言り

此圖(胡平太正知)の
 美少年大星宛らうと



森胡平太正知

此哥ハ立林隆重ガ母ノ辭世スル塩谷家
 滅亡ト聞君ノ爲小菊死ト遂致テ了忠意ト
 歎ク三月十五年辛二齡婦人ノ
 鑑ト賞サリ個老母ノ妹アル者ハ
 肥後侯ノ藩嫁リ隆重
 夜討ノ轉末ト聞悦ホク之
 逆キリト
 姉傍トモホ
 其烈性男子
 及ヘク隆重
 末期追母ノ
 小袖ト著一ト時
 忠孝全キ勇志



立林
 隆重
 唯七

隆重
 母

文治高尾楓伊達深

讀切講釈 全三冊 出来

この巻紙といふのは文庫本なり... 漢切章句... 傳新のおまら... 出板のり...

江戸作者

為永春水著述

梅村舎南堂書林

正史 實傳 いろは文庫 卷之七

江戸 為永春水著



第十三回

諸説を闡して後仇の初巻と探る... 師直除く... 爲永春水の... 縁家...

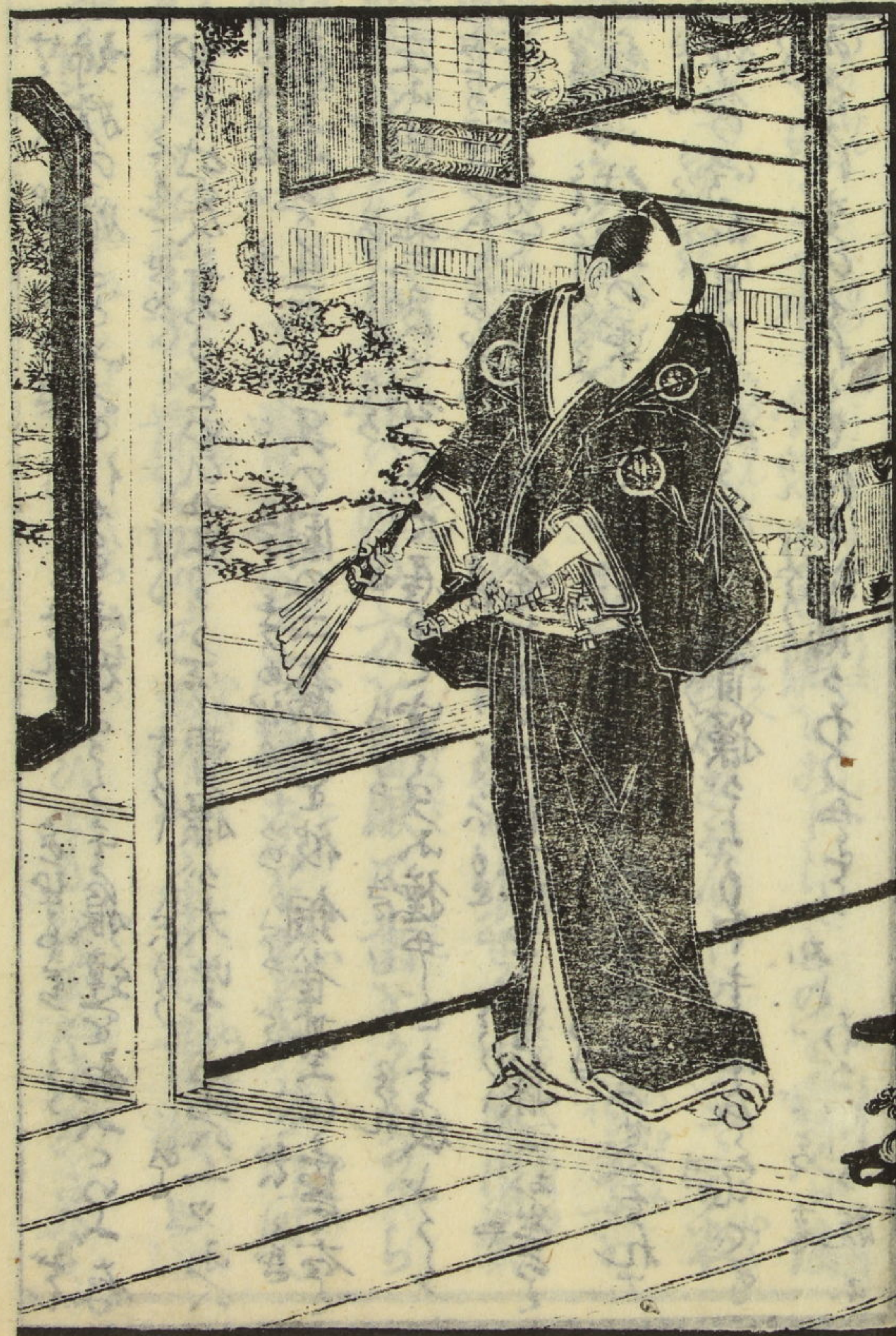
その身の内室と甘き道とを以て意根とす一是より判官の
私をよへんとする世つとつて交して然るもあつて照月の意の辨
論をいふま織の所直をまじ判官の劣はべしと思ふは
兼代内室の心づかぬ判官の内室と定り内室十一
ゆく判官の心家へ入つた侍小あまは所直をい
真の嫁小貫の度言出し一武家縁談の法小織を辯論
申すも乃屋小平時然るに何故徳儀多き申すて極谷
氏と所直の婚一ぞ是より頃の風義男の意根より尋る

の然も在りしうん心ま付代ハ男の流汗と武家要あり
町家もも男を好む者多く娘よりハお幸々をせられて
兄弟品と唱ふる一一生死と約定文輝の如く二人まじ相
死する歎もあまううたされハ西鶴といふ戯作者の著る男を
大盤と外題し本中も今うと記しう定小極谷判官の器を
添き小姓小比と若右近といふ古公を其の美男ありてされと
相替る者ありといふ噂もあつて彼等所直は不意着て
判官へ貫の度申を言入しが極谷の家小突然の着て他へ

遂に第一山内孔明の呉の國の軍容を以て曹操に曉らし
曹操の心は驚かすべしと其の軍師周瑜を勵まはす其志
所望の如く射と信て銅雀臺の賦をなすむと定む

孔明は我後するべからざるに宣ぶるも其は曹操の降未だ
も各々の軍を以ては是れが山勢を覺束さるべしと一
言を以て曹操に引返しては棄せるも後がわづらひ今度
曹操がの國を責むるも其の極も二人の者有難く奉る

孔明は我後するべからざるに宣ぶるも其は曹操の降未だ
も各々の軍を以ては是れが山勢を覺束さるべしと一
言を以て曹操に引返しては棄せるも後がわづらひ今度
曹操がの國を責むるも其の極も二人の者有難く奉る



せんう昔呉越の軍の時代は范蠡が美女の西施と越王
勾践の使者の許へ送るまで終るまで使者と亡し
屋
富と周が使者をばせしは我くと見せし高氏の腹と
曹操の妻小竹園ううわうわとて主根小竹園ううわ
ううわのふ 周へ主とわす我が主根の當付ううわ
園の先君の夫人小姉の方が成て居るまで終る拙者が
書でおぼろのまは貴君の心をもわすまのが曹操の二女と
執るううわ故とわして居るまうまをわす拙者をわして先

代君の討虜將軍の夫人と私の女房と淫樂ものよせううわ
存心ぐ居るまうわの曲者ご 上を根達へ當付ううわ
おぼろのまはそれともわすわ不助ままをまうまの直平
此免を成電小系あるまをわしてわの毒な 周へ主とわす
ううわはませんが曹操わが余るまを法とわのまわわ
まの合点ううわわの竹園へ責ううわて見せわがまを軍兵を
皆殺しふして呉のひけまは海わ孔明軍師も今卒軍兵の
脚をわして呉歳ト見よう呉の園のまわ張昭顧雍

とらふもこし降参を進む一者も此に付け程普韓當
曹孟徳もくわい入英勇と働き軍兵を招へ終ふ曹
操
我の

撰者春水曰史因余江東六郡八十一別の大都督と
孔明も亦くする軍師されども魯人余に依て
亮一妻女の呉霖と他人の抱さんと言を獲し
亮と特れごとく大軍と隨へ曹操の百子孫の
せんとい定せし。まて既直の如き小人右近と慕

孔明の如き
孔明の如き
孔明の如き

ひつりより法外のことと教訓のき一と教へ
多くを居たり極の論多し又垂々の武家の
只此れとの一因一召しぬまもあつべし
二と多し公學者と或矯倣の召しぬむ
らまがみ節道二八塩谷氏の
ま館のま若ま上りて道二道の南を廟子め

多道二ハを煩人々の教入を學者のけしき自然と繁
威光もゆゑ思ひ居るを更なれば大各の至君の所おと
之ども痛とくも法とがー公申小憤らるゝけしき
主と正然とありまひ 君ニ道二を方ハ其後諸侯の者
由諸侯の側近く出る更とも色さるゝいさひとやまの
ぢやも戦ふ身で之け方が面とあむらうゝ氣と持た
我とを待たうと思ふてふまひハ極合判官ハ由緒平を大
各ハ断直の悪言を終を中ハ四捨んとしうゝ大をの
と

ふまひト此地の上道二翁をを候ありどけぬひとぞ實
も貴人高位の尊厳を善義と評せん更ハ後世様ハ善義の
及ぶべき更ふむわト然ハ極合判官ハ断直の言美礼ハ
他人の見聞も堪へぬひ能き寸延み更せらるゝとぬぬと
控帯これより控小判官の内執事深き位幕遠及君ハ彼
騷動の必あり十二日の夜ハ入判官の由時ハ見年と
出控帯判官由大切の所復ハ氣持もさるべトその
氣也針めやしく持来せりと作て由さるの言をいせ

らまけれ判官の信交の由実意を脱びて遠
弱の君小由酒を違わらまに以睦しき仲まりければ隔
あくくさひまぐさく由を信しよみかま折と以く書列
君ハ判官の由側の人まきを頼れ彼師直の言授りて
毎の花子とまよ一まよ一言せられもぐと由異見小度
まよき一條と由次のるゆて國傳人する神時よふ所まよ
まよ君の由大百万一君の由小は遠くも思し召すの由て
ゆふ妻まよと下一まよぬまよは我師直と亦給て切

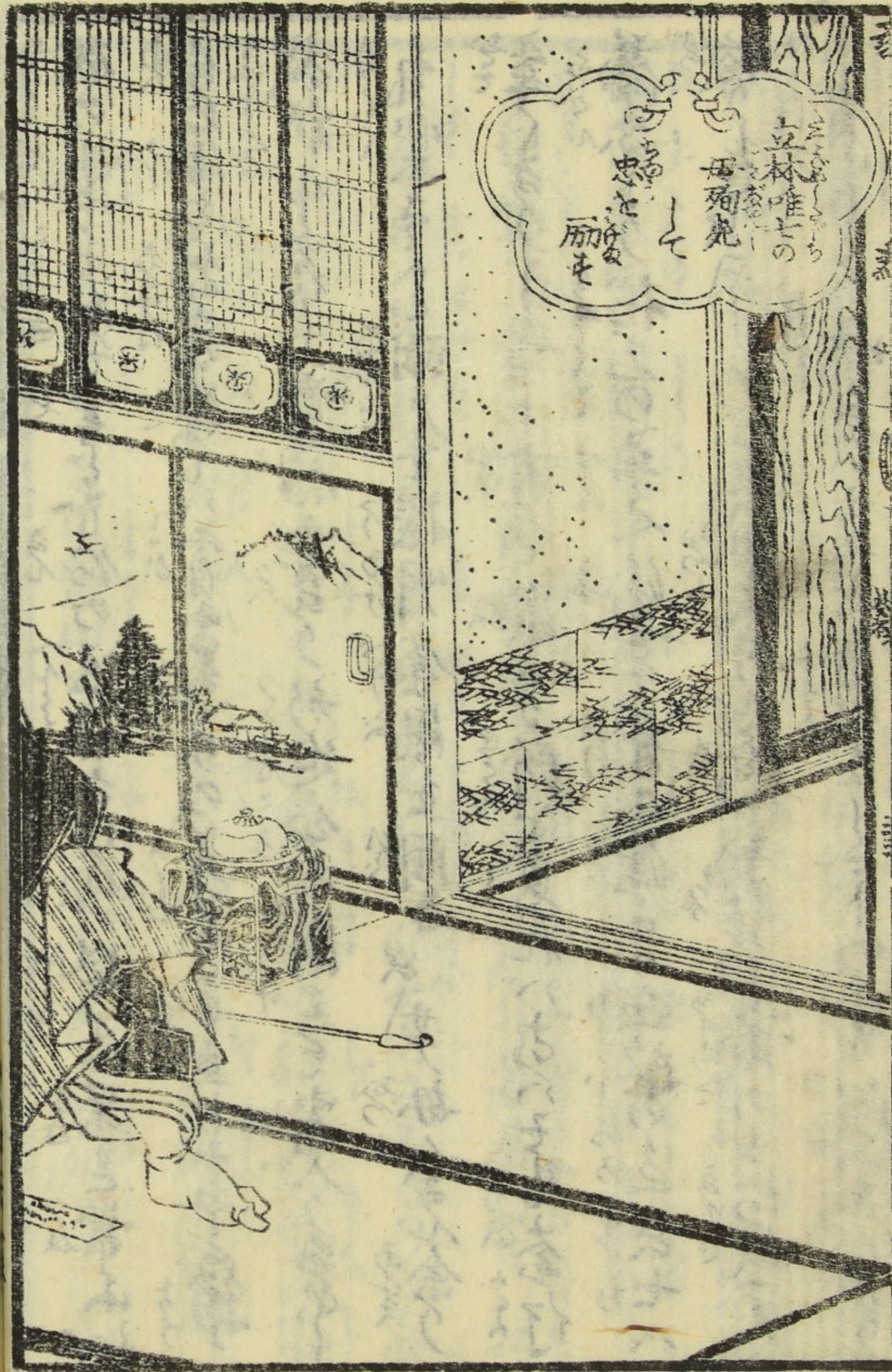
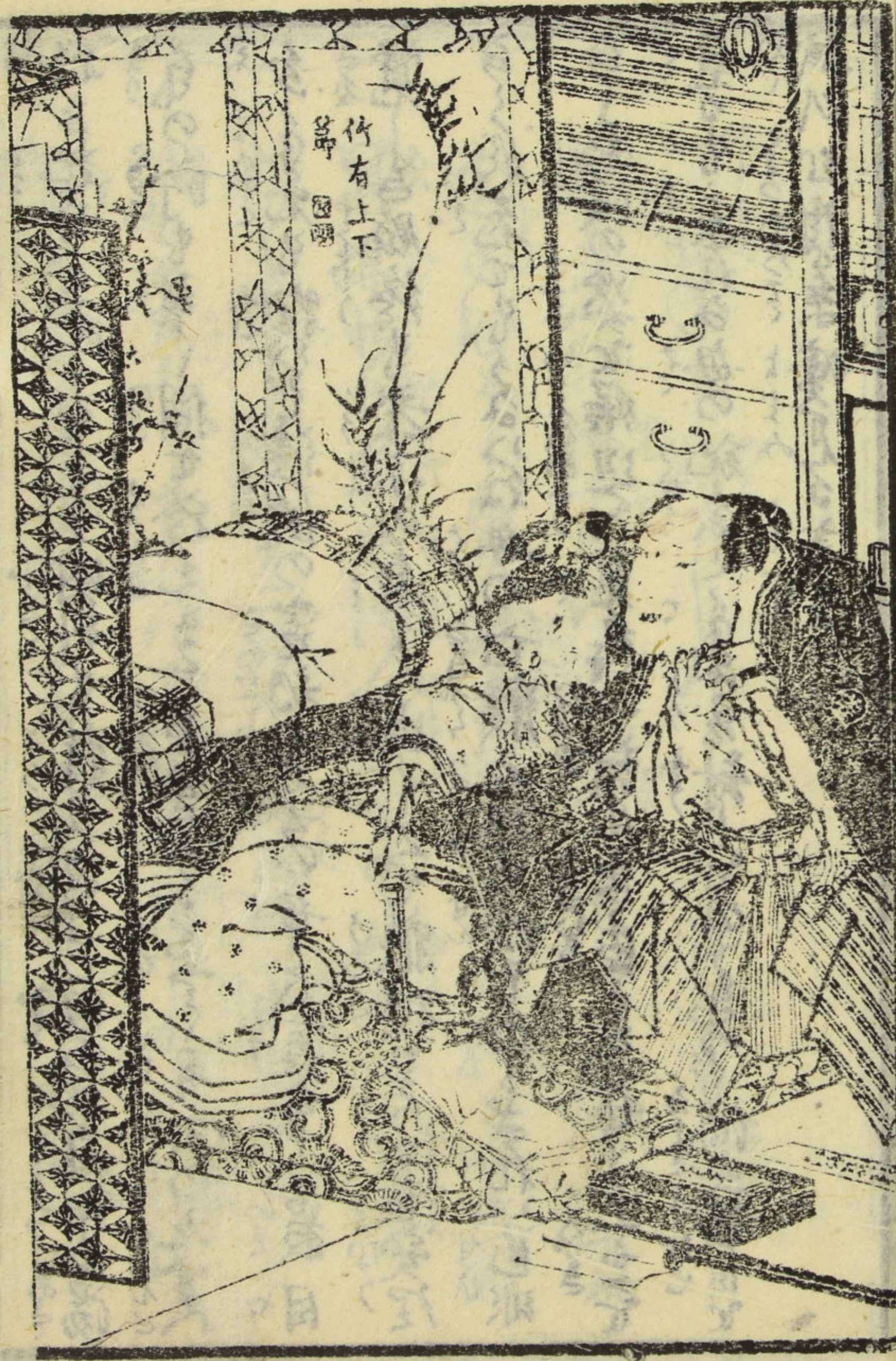
ふまるの腹を切らるまよまよ君の家國ふらるる殺らるる
うと然ハ思ふも空あまの身ハ殺く想しき

第十四回

漢土晋の豫讓ハ范氏と王の臣下より愛小智伯の
人ゆて范よと亡はけ第ハ豫讓智伯小後ハ使一がま後
趙襄よとよ人智伯と亡しとまよる豫讓ハよふまよ
心を勤し心を改て所為と知をまよ科人とまよ國を不澤
持する賤き役を勤めて趙襄子が雲漢小由を侍て智伯の

わんざん 金づゝも 新嘉坡の 山崎の 徳と
あつて 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
大里と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
まゝ 四十余人の 義士 殿東の 徳と 徳と 徳と 徳と
まゝ 且 況 義士 殿東の 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
とら 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
判官の 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
名 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と

御 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
いん 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
女 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
ハ 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
まゝ 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
まゝ 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と
あつて 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と 徳と



抱き抱せど死してより何れも後ろきと思われ身中も湯
気の所もさく損を珍もまた愛せしる事なく丹念の丸す
かゝる元もねむる強健の宮初勇まの母入言まぐり最目
覚しき腹終も孝子の身入ら坐しんを狼狽まらもま屋
ろく灰老てもうらぬ母の亡骸女抱の冷もあざれば足跡
ろく死後の姿と様迎て見れ一射ふまはたさのせし上り
見ると喜れぬ母の記念とまはる射とあつて涙の海に
拭ひ公用ま傳へる文交

一 抱き抱せど死してより何れも後ろきと思われ身中も湯
気の所もさく損を珍もまた愛せしる事なく丹念の丸す
かゝる元もねむる強健の宮初勇まの母入言まぐり最目
覚しき腹終も孝子の身入ら坐しんを狼狽まらもま屋
ろく灰老てもうらぬ母の亡骸女抱の冷もあざれば足跡
ろく死後の姿と様迎て見れ一射ふまはたさのせし上り
見ると喜れぬ母の記念とまはる射とあつて涙の海に
拭ひ公用ま傳へる文交

難多の混雑よをしと入しつる強多の三選宮戎難具の持
運の小當或冠淡大方きび本衣のまんと評多の仲ふ織羽矢
老の徳へ老人兼く重く重くふむらある老妹のさふありけれぬ
葉の仲ふ二風しをき近りの船を雇ひ多くはあちて由を敷の
裏のふつらふせを空のまへに候ふあせし船職法家仲運の由中
と書教くつらふはかま飛へ家賊を捕せ海多の由行つて海陸
させの苦もあし救百人が運運渡のままかへしつるを安結
らふ雷空の働さるを美と清教と今余の法由役も感の雷空の

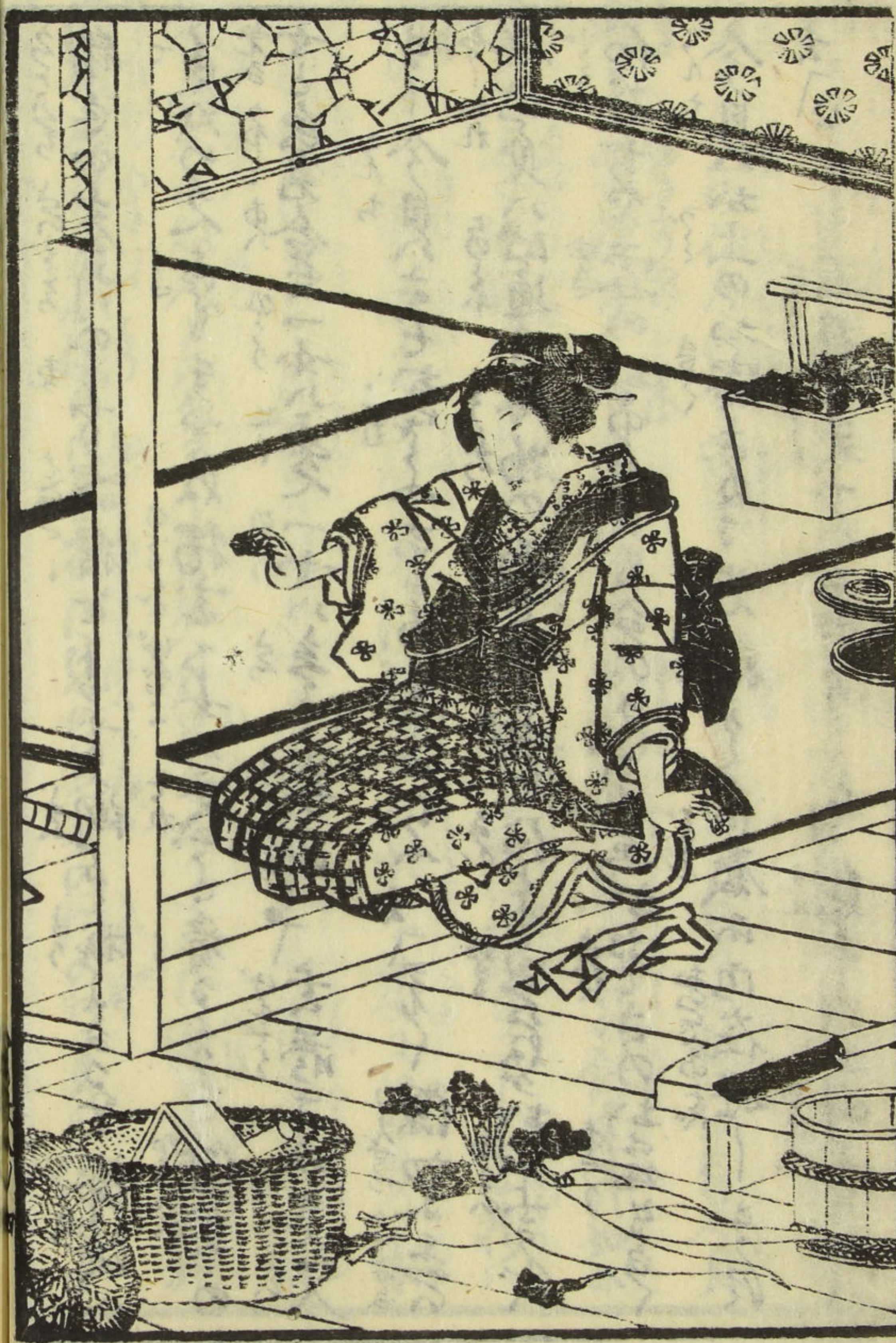
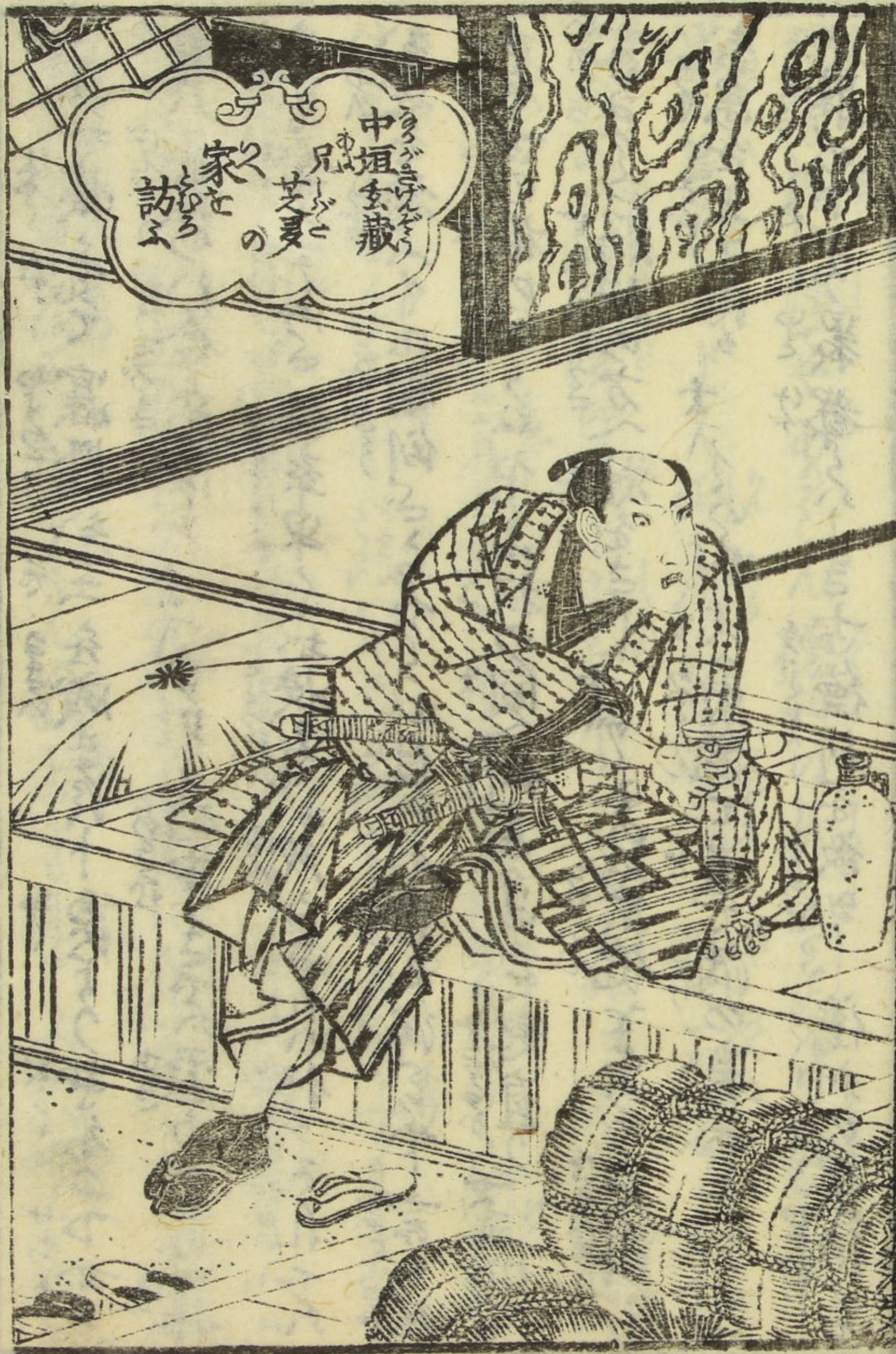
まふ出らふつた別で俄那の家内ふ高業ふ行舟家の
るふたを仲又樹おも極るくくつるを飾りし舟り費のた
具をせ候へ運葉ふ葉舟まきへ檢使の役つ体置せしり
振ふらふらひまふ外流りの取まへし枝目のわらぶる引候
まの葉中つらまき運の路と情に掛帯れが運運とらふぬ
師直の行末安穩あるまきと今候人さる人々の候候とらふぬ
累のきり御役人のありけるが案ふる運船中れ付らふら
はの倭候名倭魂丈丈丈の思の候もし四十をらふはの取の

桓氏の養子とありてまゝ家と継て相續し仲直を養ふと云ふ判
官ふは一平生酒を好むと癖ある日一一身の中一見もたれぬれ
更ふ武家なるの役ふまへま人物のまことま併りたて着せ
凡そまをまする人もゆゑに塩吉の考せまも重役の人と云ふ
外も都のまをの住めるゆゑと賞一うとまをを何と云ふ
彼まをの酒の癖と居眠とまする倒て家入と云ふ後と云れ一
人更と賞せざる時、陰でも用ひる第ハ怒ら賞を平しと云
勤も又まをまやふと云ふと云、他家へ使者の役ふと云ふ

るゆゑ一書を果つてゆゑにまを得る一十方へ使者の
役と勤て得るゆゑに鎌倉の頼朝の御前中塩吉家の使者と
塩吉家の御前とて評判ふせられやゆゑのまを考するも使者と
勤る役も友と評されまを家と云ふも第のまを然して四
敷を考するも一三九ふま行ゆゑに平野のまを考するも
まを鳥の上へ居眠せしゆゑに細ものゆゑに考するも
まをを考して路平の食ねがまを考するも考するも後
まを考するも後平の考するも考するも考するも

礼を言ふは其れもいさう〜可成り風俗が癖ある酒の飲
後へ兄の仔たうも昔〜も思ひけるあるは極月士貞今月
朝う雪降中〜雪まじり〜北風は皮膚赤の針をいぬ
覺ゆる氷氷軒のつらふ社あるその又暮のきさう〜が
例の〜酒の寒さを防ても防難るおぼゆるは女といはるる赤
合羽體はまも白裳が堪ひて糸のちられ〜を首の項〜と
思ふおれぬ人といはる〜小見へぬ思ふあう〜む雲とぬまは
酒後秋時侯の山を委内兄の芝美の門のたよりわたる

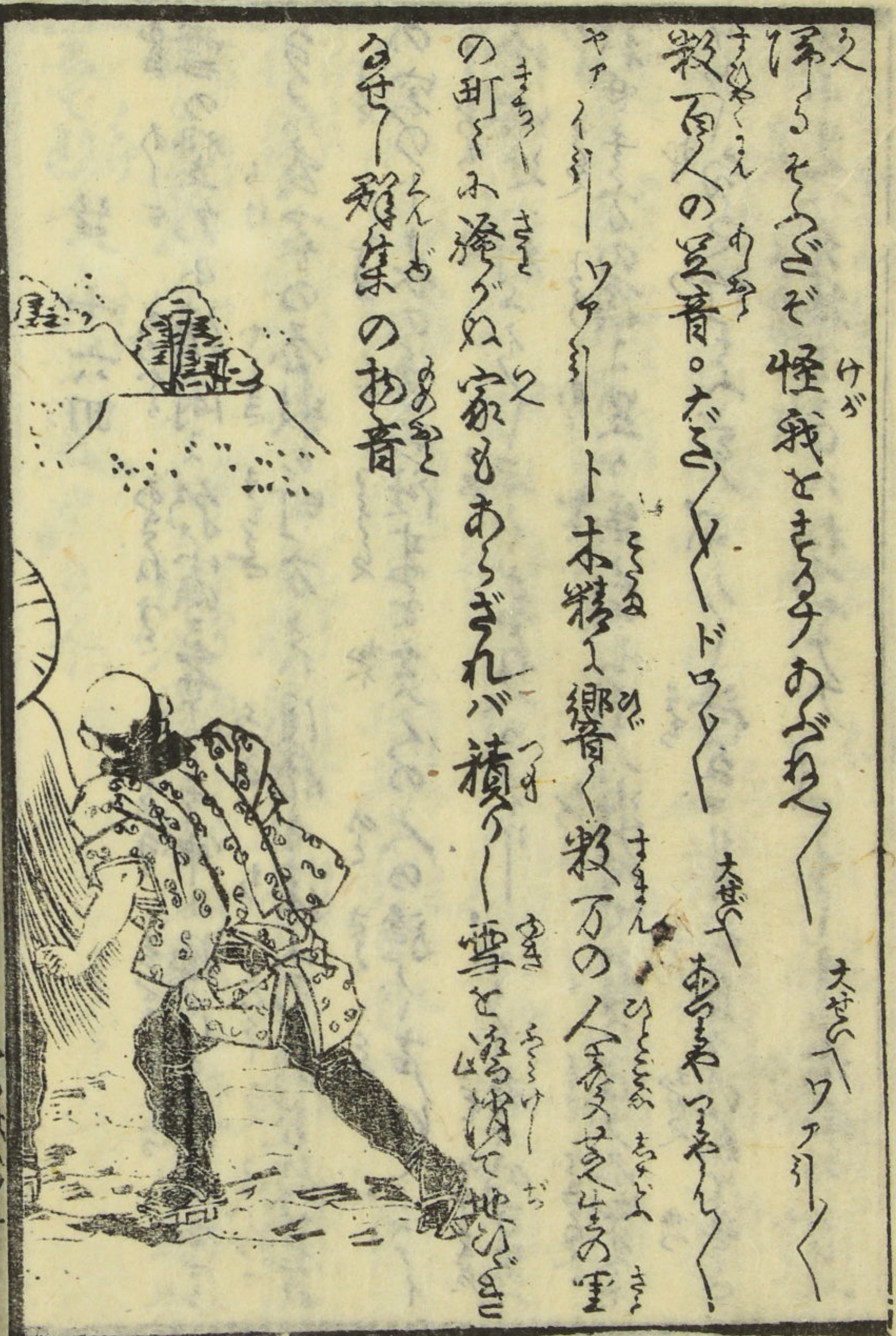
傍に白素祈の上り為櫻とドラリ倒る〜松よるるを脊後へ
〜成つ〜人言もま〜ぬ指言〜女ハ夫と〜着る〜傍業の
女と見合會一女の妻一女の妻〜上り口〜ま考さぬをい入
ま〜今月ハま〜おぼ〜ぶさるま〜ころふ〜ま〜ノル〜深切みあひ
保け身ハは通り好物の酒で〜をま〜何とも思ふぬが〜兄士〜ハ
何様ぢや雲のおの〜もるひ〜う〜ハ〜お守〜このお守もま〜
今月ハお上のお客さぬで先程〜く〜内殿ハ〜在好〜〜ま〜
ま〜引〜左様〜丈夫で〜ま〜ぶ〜と〜ま〜お母上〜んハ



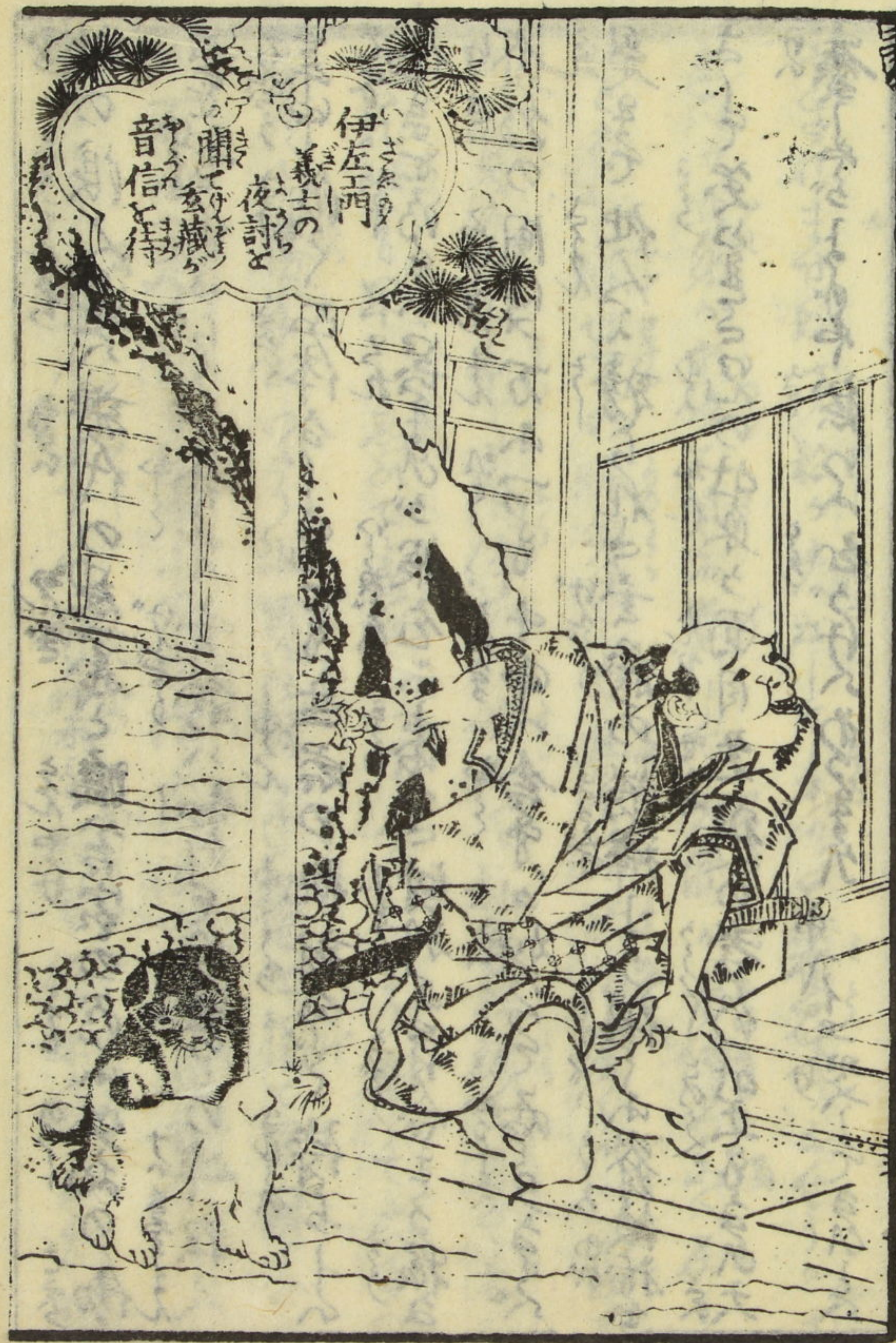
鐘口は一寸抜くけしうがけ身が白く着て和らる顔も色は
儼然と又山狩も多き風情されども破落し露巻柄の刀公
仙合の丑の真積氷の如きうらまふ武士の本意を云れぬ
賞婚とあると云ふが遠ひもさるド仙草と身は世に
ちやと詔の間小時後うとち世満の鐘の音のうらまふと
告げらるは時刻の夜去る同意の人うらまふ連て主
仇と富野家のいかに押入合言葉山震河竹の意討
あて懸く戦ふ家の中

第十六回

雪の舞は清閑し物寂る音一々中は極月も春もあま
りく武家の屋敷の町方々風情も遠くは刻も夜更
の窓の下表の方の社事をまゐる人の降ぐ声はて「ヤイ
今安辻へ行くと早く来ねえヤイ」ヤイと吉方先へ
移りき方の後入足が重くちやテ追付て着るひのや不
ア、向之行もさうゴウと待たヨリけ身が白く和てき
のふ先へ夕接するのわやアテ、ソウとまゝ花路の方へ

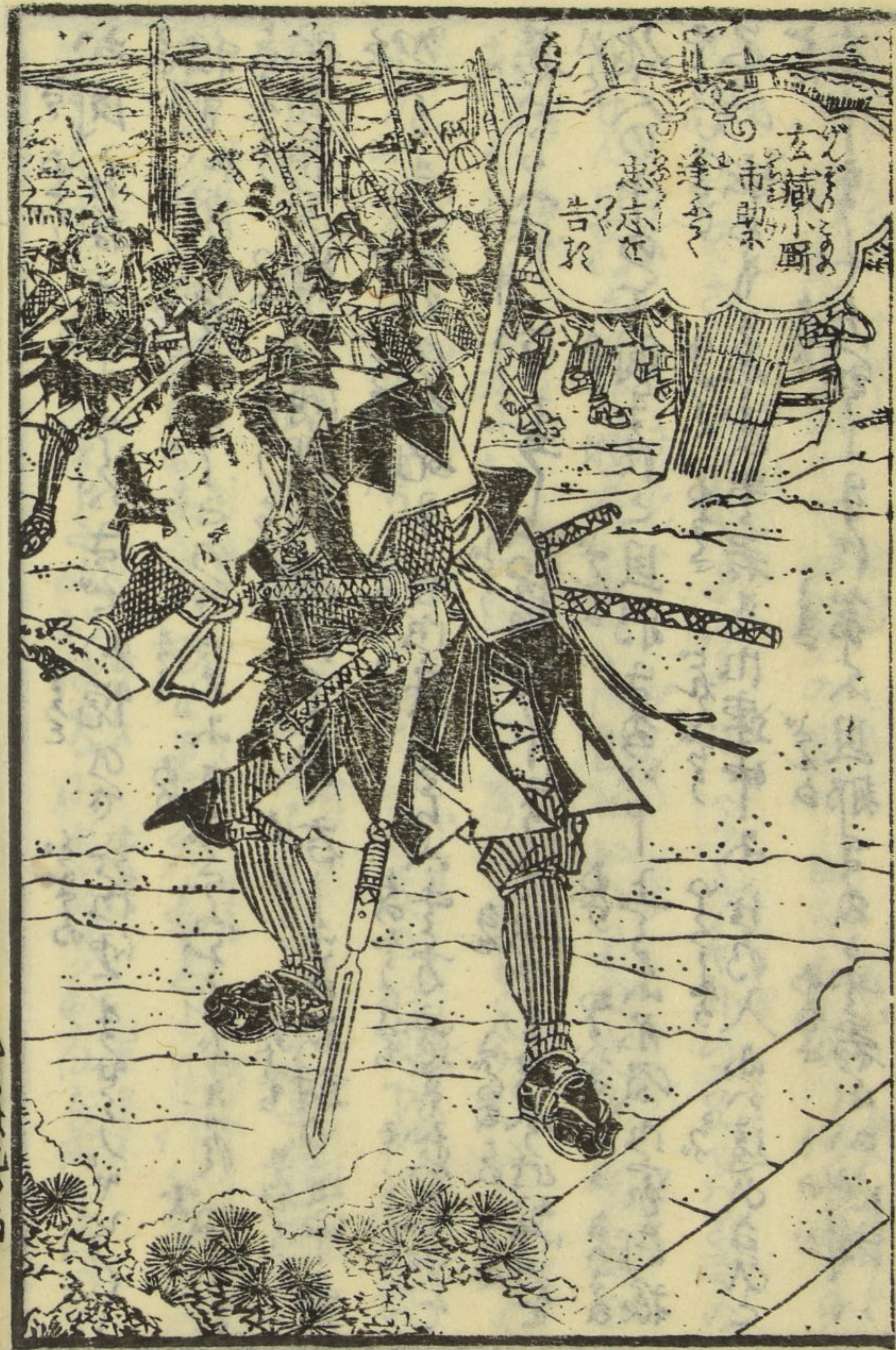


え
 帰るそとぞぞ怪我とみる子あぶね
 救百人の豆音。たさくしどろろ
 ヤアイサーワササート本精入響く救万の人
 の町とみ隆ぐぬ家もあざれ積り雪と
 るせー難集のお音



並に橋入りのされば透ぬる言のこゝ覚束りぬる人
ふもふも一もけりぬかろくあると近くすまみも同様の
先くより中備りを見し所より仲垣氏の土まがれま
西國の法儀をなまはせ宣をのりける怪我もけりぬ
如くも御の酒を置も乱れお記を逐くしるるるる
あまた法の備りの事を見ればけり所の第一を奪ひ先へ進
み仲垣吉彦行年ある二十八支常の碎ねり引ま
りも重なりまはまは總頭中を控て杉山城白布を以て獻

巻く銀を引獲りまろく早くも透ぬる見高へまをさける
まこやく透ぬく市ハ
モウ一欠かして糸ドリまろく見おの大勢ふ担削されてま
行れまんろくぬく只今お目ふろくまのまろくを覚ぬ
おまを度ぞんトまのまろくお草外を成りてまのまろくト
探りまをまろくまのまろくイヤまろく考れまのまろく
折角お兄さまの所へお眼をみまのまろくお目ふ
まろくお姉上さんハお獲りまのまろくおまのまろく



まゝに悦ばしむる間もさういふ傍へ向ひて市ノ邊に逢人も
山麓にせしむる一山に遊遊するまゝに申入おどりの且おの
川合身さぬで塩谷のお金屋中へ山食ふおはる人におか
さぬさういふ度初と敵討にお出を成て子トシテ馬場の
愛する且おの安宿に幾一町さういふおはるおは成て
トア〜〜差申ふさうて居るまゝトシテおはるおの
送船がヒツクリサ〜〜も勇む神道氏の勇ま〜〜と
いふも且お入位進と飛ぶまゝいふ秋津嘉侯の勇ま〜〜と

まゝに悦ばしむる間もさういふ傍へ向ひて市ノ邊に逢人も
山麓にせしむる一山に遊遊するまゝに申入おどりの且おの
川合身さぬで塩谷のお金屋中へ山食ふおはる人におか
さぬさういふ度初と敵討にお出を成て子トシテ馬場の
愛する且おの安宿に幾一町さういふおはるおは成て
トア〜〜差申ふさうて居るまゝトシテおはるおの
送船がヒツクリサ〜〜も勇む神道氏の勇ま〜〜と
いふも且お入位進と飛ぶまゝいふ秋津嘉侯の勇ま〜〜と

人のれバあやうと度と彼ま流が能持し勝る其の古き
 書を評し度く侍れ貸名残ふ持たぬ古徳利の底不潔
 たる酒を好んで賞ひ酒上は塗す、礼言人もあつしとわ
 けなき
 孫まさるるまは伊左も幕略よりぬと徳利まで記念の
 品と家来の身細小包む家の室宝をど仲植ま流が徳利
 の傳記と後の世まで語り傳へて書れり
 一徳利平が友人古耕者ある文東が常ふ味する酒を縮
 文小綴りて孫女子の覽ふ備ふものあり

第十八回

室小義堂の身と方して後仇の時集をたつ後任居を
 せし位所と替名のあうまうと尋ね後の世までもその事
 書を家系にやうり、語り種とまれば古書をいして後世に
 めを記す
 鎌倉の町の内まで使町三丁目小山を流る湯といふ者の
 裏ふあつしひあり、貸屋あふ富備とあり、
 ○垣見左内 実ハ 一人星力餘

○ 垣見の郎 左衛門尉 実ハ 大聖寺良之助
 ○ 谷 仲庵 醫師 実ハ 高寺十内
 ○ 又四郎 実ハ 杉の谷半之助
 ○ 原田 介右衛門 実ハ 原田政之丞
 ○ 森 清助 実ハ 近夏勘六
 ○ 三田村 次郎吉 実ハ 三村次郎吉
 外ハ 大聖の若衆二人 近夏ハ 江州の在所より連れて
 来り 僕一人 都合十人 實度妻小在り といとぞ

○ 新子 盛子町六丁目 在る者 吉右衛門店
 ○ 神道者 田口一直 実ハ 茂田忠左衛門
 ○ 田口左内 実ハ 茂田清右衛門
 ○ 岡居 和田元貞 実ハ 原 今左衛門
 ○ 山崎 嘉吉 実ハ 若村甘助
 ○ 醫師 三橋 隆貞 実ハ 早稲久左衛門
 ○ 郡 氏八市 実ハ 長嶋八十右衛門

○ 考谷又助

実ハ

おりのきんこりん
忠野泰吉

○ 考谷小市

実ハ

早稲孫九市

日在小者一人 都合六人同居

同町四丁目 庄屋吉市右衛門在

○ 中田藤月

実ハ

風間十次郎

○ 原勘助

実ハ

仙三郎三郎右衛門

○ 松左喜助

実ハ

風間喜右衛門

○ 同新七

実ハ

風間新六

同町六丁目 秋田屋権左衛門店

○ 山本長左衛門

実ハ

鳥森助左衛門

芝生濱吉所 捨物屋惣吉右衛門

○ 高田信左衛門

実ハ

箭多五郎右衛門

婦多川 風呂江町 楠米屋太吉右衛門

○ 医師 西村丹下

実ハ

尾久田定右衛門

○ 西村清左衛門

実ハ

尾久田孫大次

定右衛門の元近夏勘六の舎弟多しを後依の兼頼月の

初旬尾之田の妻子と外藤伊藏殿の内長家へ嫁せられ
左のふ外藤室八塩谷判官の外戚より初尾之田氏ハ
縁ありしとあるなりと云

養生玄好町の住居

○内藤下弁左衛門

実ハ

安曇貞平左衛門

此よりは文庫二編目不記より貞平の妻宅と後不玄好
町へ引移りし別宅と未考

○富田源右衛門

実ハ

浦妻三太夫

下部一人を以てしつゝの如かりされ安曇貞平の妻宅と後不玄好
町へ引移りし別宅と未考

南八條保里稻戸町平野屋十左衛門の妻宅と後不玄好
町へ引移りし別宅と未考

○吉田左衛門

実ハ

筑紫源五右衛門

○服部新三郎

実ハ

大蔵文吾

○清原守右衛門

実ハ

佐藤有徳七

○医師春庵

実ハ

貝賀源三郎

右の國居せし如くありしと云

園城 佐合町 紀伊國 何某店

○長江 長左衛門 實ハ 織乃安

○水原 長左衛門 實ハ 藤野 十平次

○小山 清左衛門 實ハ 小山田 左衛門

○同 三津根 何某店

○杉野 九三郎 實ハ 杉野 十平次

○渡辺 七平次 實ハ 渡辺 七平次

同 婦夜根 達老町 何某店

○米倉 宗三郎 實ハ 米倉 伊助

○小豆 宗三郎 實ハ 小豆 宗三郎

○松平 宗三郎 實ハ 松平 宗三郎

○藤原 宗三郎 實ハ 藤原 宗三郎

○今井 宗三郎 實ハ 今井 宗三郎

○内田 宗三郎 實ハ 内田 宗三郎

○山崎 宗三郎 實ハ 山崎 宗三郎

今更らふにあつたも軍余人の忠義士を賞賜あつて男
人のあふたつて群るへ一後世も忠義者なるを賞賜する人多
けれと忠義者余一と法ふとせしめられ切後一と公道を立たし
礼節とある由を兼て切されれば死刑よるを賞賜の復討代
ふもまた後世もあつた人さく人傑するべし
何ものも皆あつたの世の中死ぬる者なりぞ賞賜のけつと
哥の意もあつた死ぬるを公の賞と定めて説ふれば余
むも最精のめりるべしあつた人さく人傑するべし
三月、塩谷侯の城に

城を抗ふ討死せんと言或ハ殉死を遂んと安んずる者又ハ
そのちやまのあつた人さく人傑するべし
今後山科の大星が屋敷に身ねる追盟
言一者凡百余人あり一と既小道義を發して今後山科に
近まは追盟の者六十余人是等の人も亦余ハ忠義の跡
重きを思ひて列し入るもさき今この措けりしと
あつたも約を違へて逃匿る者ありとや今も忠義士の多き中
あつたも一而して恩を感じて不忠不盟の人數ふる勇士ハ
實は絶世の人傑古今をしのぶ忠烈といふべし

ふハハるるん
不破勝右衛門

四十年以前の浪人あり

○ 風子新太

十四年春二月の浪人あり

○ 風子新太 風間喜多勝が次男少て叔父の里村は勝つ

養子とまり養父ととも浪人も東ふりて遊元但別後

の世中中堂又助といふ人の許小食客とまりてあけれ

塩谷の録とつけたるあぐれども実の只入共多勝と

兄十治本が義堂あるふとらて六八星之種くと競て盟の

連中ふ加うー英勇あり

○ 園野九十郎

追盟の人改て二代の金さの

○ 佐藤長助

改て二代のる勝つて

右の如き義公の人とみりてて遠盟の者六十七人のり但この

名目の中ふ不義不忠とも定め冠三異統の士十余人あり

夫ハ拾遺といへるううく此へ一先約束とて遠て盟を破り

面とせし居ふあるせい

奥野の監	高谷源左衛門	進藤源四郎	河村信右衛門
小山源左衛門	杉谷源左衛門	田中権右衛門	佐藤源右衛門

園野九十郎

長津寺左衛門	長次左衛門	多景左衛門	豊田八太夫
各務八右衛門	里村伴左衛門	陽山守左衛門	榎戸新助
上方藤左衛門	上野弥助	波辺覚左衛門	山上安左衛門
幸田子左衛門	仁平左衛門	波辺信左衛門	川田入左衛門
久下織左衛門	猪子理左衛門	田中右衛門	西寄佐左衛門
梶半左衛門	高久長左衛門	松本新左衛門	近松右六
園本左衛門	田本左衛門	田中代左衛門	進藤源吾
大石孫四郎	川村太右衛門	田中麻左衛門	垣屋武左衛門

三輪末左衛門	三輪孫九郎	小山孫六	井口半藏
山羽理左衛門	嶺善左衛門	木村孫左衛門	森野新助
猫左衛門	吉田軍左衛門	小幡孫左衛門	木村信左衛門
松浦順左衛門	井口忠左衛門	生野十左衛門	上田三左衛門
中野半平	佐々小左衛門	中野理左衛門	中村清左衛門
鈴田重八	田中貞四郎	矢野半助	月尾信左衛門
毛利小平太	小山田左衛門	瀬尾孫左衛門	

右の六十七人又とてどぐろ悪党より縁入義士の中よりける者

野村が遠東のひとと論じたりありてその巻の
一巻の首官より一巻を讀む

為永運校著

狂文亭為永春江

狂詠舎為永春曉

淨書 瀧野 音成

江戸狂訓亭為永春水撰

正史
實傳
いろは文庫卷之九了

いろは九了

